大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

〈隔たり〉を維持した〈分有〉の動態：LogosとLogoiとDia-logos

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-08-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 敦彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/00017003

History of Educational Thought Society

〈フォーラム1　マルティン・ブーバーにおける言語・時間・力――〈隔たりと分有〉の哲学とは何か　コメント論文〉

〈隔たり〉を維持した〈分有〉の動態

――Logos と Logoi と Dia-logos――

Dynamics of 'Participation' Keeping 'Distance':
Logos, Logoi and Dia-logos

吉田敦彦（Atsuhiko Yoshida）

翻訳的緊張感とも言うべき強度をもつ小野論文の思考の軌跡をたどりつつ、まず、小野氏が提起するブーバーにとっての「翻訳」の意味を、彼の自伝を手がかりに、「Logos（ことば）」と「Logoi（諸言語）」の二重世界を架橋することの（不）可能性の問題として把握し、そこに小野氏の言語・時間・力に関する翻訳的思考の意義を確認する。次に、言語で分節された世界と、それ以前の根源的無分節性との二重の世界の折り重ね方、不断の往還の仕方をめぐる、思想史におけるその幾つもの諸相を描き出した井筒俊彦の考察を補助線とした場合、ブーバーの対話哲学ないし〈隔たりと分有〉の哲学の相貌は如何に際立てられるかを問う。その試みを通して、小野氏が言葉を尽くした、「〈分有〉の只中でなお維持される〈隔たり〉」の動態と、そのトポスにおいてLogosが自らを分節しつつ現勢化する「Dia-logos」の本態についての理解に迫りたい。

はじめに――翻訳的緊張感

この小野論文は、それについて語ろうとする者に、ブーバーが書いたものについて語るときに直面するのと同質の緊張感を与える。それは小野氏が、「いいあらわされることでその本質が解消されてしまうものを、それでもなおいわねばならぬものとしていかに語るか」というブーバーの全思想的営為を賭けた問いを、自らの問いとして引き受けているからだろう。この論文の真価は、論理構成の一貫性や概念分析の精密さといった通常の論文基準によって測ることはできない。そうではなくて、ある言葉で語られたものを、他の言葉に置き換えて語ろうとする、その間隙に現勢するリアリティと向き合う緊張感――いわば「翻訳的緊張感」――の強度によって、確かめ証されるべきものだ。

言語活動の可能性の限界を熟知したうえでの、ギリギリの言語実践。その方法を自覚するために、ブーバーは強い意味での「対話的思考」という方法を提案した。この論文で小野氏は、いささか手垢にまみれたその言葉では掴みにくいdia-logosの本態を把握するために、「翻訳的に思考する」という方法を切り出してくる。そして実際に、その翻訳的思考という方法を用いて、ブーバーのテキストと向かい合う。「言語」と「時間」と「力」をめぐってブーバーの語った原語を翻訳的に思考しつつ、いわくいいがたいものと語られた

NII-Electronic Library Service

History of Educational Thought Society

もの、現在に生成するものと時間の中に収められたもの、かたちなきものと形となったもの、あるいは潜在する一なる普遍と現勢する多なる個物、といった「と」の二重性の、その間の襞に分け入りながら、二元対立の陥穽を避けうる言語的表現を探索し続ける。

以下の拙論は、そのスリリングな思考の軌跡を辿りながら、それに触発されてブーバーのところへ赴いて問い直してみたり、違った視点から補助線を引いて理解を試みたりしたことの覚え書きである。まず小野論文から気づかされた「翻訳すること」の意味を、あらためてブーバーに尋ねてみたい。そこに、「Logos（ことば）」と「Logoi（諸言語）」の二重世界と、それに関与する小野氏の言語・時間・力に関する翻訳的思考の成果を確認することになる。次に、言語で分節された世界と、それ以前の無分節のリアリティとの二重の世界の折り重ね方、不断の移行の仕方、切れて結ばれる仕方をめぐって、古今東西の精神史・思想史におけるその幾つもの諸相を描き出した井筒俊彦著『意識と本質』を補助線とした場合、ブーバーの対話哲学ないし〈隔たりと分有〉の哲学の相貌は、どのように際立てられることになるか、序説的にではあるが問うてみたい。その図解を含む試みを通して、小野氏が言葉を尽くした、「〈分有〉の只中でなお維持される〈隔たり〉」の動態と、そのトポスにおいてLogosが自らを分節しつつ現勢化する「Dia-logos」の本態についての理解に迫ろうとする。

1．LogosとLogoiのあいだの翻訳——ブーバーの自伝的断片より

1）ブーバーにとって翻訳とは

ブーバーには、ハスィディズムの物語やヘブル聖書のドイツ語訳をはじめ、数多くの翻訳の仕事がある[1]。しかし、「ブーバーにとって翻訳とはいったい何だったのか」が、正面から主題的に問われることは、たしかに稀であった。小野氏によって私たちは、こう問うことが、ブーバーの対話概念の通俗的理解から離れてその本態を掴み取るために、とても有効であることを教えられる。ブーバーにとって翻訳は、「ブーバーの思想をつかさどる強力な重力源のようなもの」であり、「対話哲学とは、まさしく翻訳そのものの謂いだった」（5頁）という誇張法が成り立つほどにまで本質的な意義をもつこと、それを小野氏はこの論文の全編をとおして明らかにしている。

「翻訳」という「異なる言語への架橋」の瞬間、ひとつの言語から離れ、もうひとつの言語に着地するまでの、その間隙に、分有されるべき何ものかが、一瞬その剥き出しの姿、言葉で分節されて掴まる以前の形なき姿で現前する。既存の言葉を引き剥がして、新しい言葉を置きなおす、その間隙にだけ、その言葉が指示していたリアリティが一瞬すがたを顕わす。ある言語に収められ、分節され固定されていた流動的な生命力が、その言葉が引き剥がされた瞬間に解放されて、蘇生する。いまだ新しい言葉で定義されてしまう前の、そのリアリティそのものと出会いなおし、その言いあらわし難さと向き合いながら、にもかかわらずあえて、それに別の言葉を与えて語りなおす[2]。翻訳という営みを、そのような行為として理解するとき、その醍醐味は、既存の言葉が新しい言葉に置き換わるその間隙の、スリリングな緊張感にある。

「翻訳」という営みのこういった側面を、小野論文の示唆のもとで考えているとき、少年時代のブーバーが「翻訳あそび」をしてい

NII-Electronic Library Service

History of Educational Thought Society

た場面が思い起こされた。ブーバーの編んだ『出会い—自伝的断片』(3)を読み直してみると、はたして「翻訳」が、彼の人生を貫く「対話」の起動力だったことが明瞭に語られている。それは、異なる言語の間の水平方向の翻訳への関心からはじまり、ロゴス（神の言葉）と人間の言葉の間の垂直方向の翻訳の仕事に言及して締めくくられていた。そのエピソードを少し紹介し、小野氏の論考を補足的に考察する手がかりとしたい。

2) 少年時代の「翻訳あそび」

まずは、少年時代。自伝では、冒頭の「母」、「祖母」と題した2節につづいて、第3節めは「言語Sprachen」と題されている（自伝：S.15）。産みの母とは「ゆきちがい」を経験した幼きブーバーは、「真実の言葉Wortへの愛」をもった祖母に育てられ、この祖母から人文主義的理念による言語を中心とした教育を受けた。各種の言語を学んだブーバー少年は、ひとつの単語をある言語から他の言語へたどっていき、置き換えられる新たな単語を探し出しながらも、そこで失われるものがあることを、何度も味わった。失われたのは、単なる「ニュアンスの違い」といったものではなかった。あるドイツ人とフランス人が、またヘブル人と古代ローマ人が、2ヶ国語を用いて談話する場面を繰り返し想像しては、「半ば遊びのように、時には心躍らせ、ある人が言ったことと、もう一人の人が異なる言語でそれを理解したこととの間に生まれる緊張状態を感じ取った」（自伝：S.15）。そして、次のように語る。

> 人類の諸言語の多様性、その驚くべき違い——その多様性のなかに、人間の言語という無色透明の光が屈折しながらも自らを保持しているのであるが——は、すでに少年時代の私にとってひとつの問題だった。いつも新たに、そこから教えられたが、その只中で、繰り返し不安に陥ったような問題だった。（自伝：S.15——傍点は引用者）

それは「ある言語で書かれていることを、他の言語の使い慣れた言い方で説明するということは、いったいどういうことで、どのようにして起こりうるのだろうか」（自伝：S.16）という根本的な問いとなっていく。この「翻訳することの（不）可能性」への緊張度の高い問いは、「自分の長い生涯を通して探求され、次第に明らかな洞察へと深められていった」（自伝：S.16）と記されている。

3) 一なるLogos（ことば）と多なるLogoi（諸言語）

さらに、「言語」と題したこの節の末尾で、「翻訳可能性」という問題は、後年の洞察を踏まえたブーバーによって、「ロゴスLogosの世界」と「ロゴイLogoi（ロゴスの複数形）の世界」の間の緊張関係の問題として定式化されている（自伝：S.16）。上の引用文で、「無色透明の光」に譬えられたのが「ロゴス」、プリズムの屈折率の違いによって分光されて現れる「多様な色彩」が、「ロゴイ（様々な諸言語）」、そう読み取ってよいだろう。無色の光は、それ自体では目に見えない。しかし存在しないのではなく、ある特定の色（色a）となって、自らを限定して表現する。別の異なる色（色b）となって表現することもあるし、他にもいろいろ多様な色でありえる。どの異なる色のなかにも、おなじ無色の光が保持されている。それぞれの色（色a、色b・・・）は、光を分有し、それぞれに異なる仕方でそれを表現している。

NII-Electronic Library Service

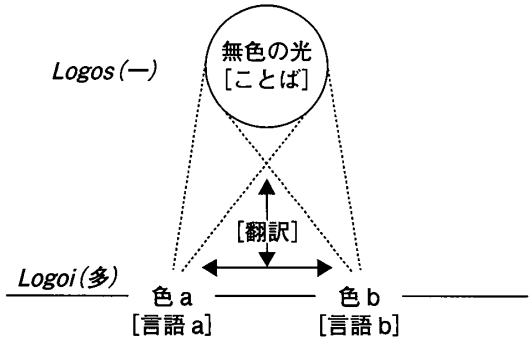

図1　一なるLogosと多なる諸言語——翻訳の可能性

「一と多」「普遍と個」の関係性を表現するこの光と色のメタファは、ブーバーが折に触れて持ち出すものであるが、このようにしてみると、言語aにおいて表現された何ものかを、別の言語bで言い換える「翻訳」という営みへのブーバーの問いの、その深度がうかがえる。「翻訳」の垂直軸について、次に見てみよう。

4)　翻訳の垂直軸

ブーバーは、自伝的エピソード集の本編最後で、実のところ「翻訳」に言及して稿を閉じる。余韻を残すその結びの一文：「いつも私が聖書テキストの翻訳や注解をしなければならないときには、畏怖と戦慄をもって、神の言葉と人間の言葉の間に踏みとどまって彷徨うことになるのだった」（自伝：S.75）。

ブーバーにとって聖書は、神が語りかけた言葉を、人間の言語に繋ぎ止めて保存しようとしたものである。それは人間の業であるのだから、そのかぎり、間違いも混濁もありえる。聞くべきなのは、聖書ではなく神の語りかける言葉そのものである——この最終節では、深刻な「神か聖書かの選択」を迫るような対話のエピソードを通して、こういった主題を語る。他方、ブーバーは、ヘブル聖書のドイツ語への翻訳をライフワークとした。では、聖書テキストを翻訳しているときのブーバーは、何をしていたことになるのか。[4]

聖書のテキストのなかに耳を傾け、人間の言語（言語a）に繋ぎ止められた神の言葉（Logos）を、その留金を外して救い出し、そうして今ここで新たに語られることばを、今度は別の言語bで語りなおして表現する、そういう仕事をしていることになる。そこでは、聖書は単に過去の記録ではない。聖書と対話し、いま一度、神と出会いなおす。それを通して神が面前にあらわれ、たえず新たな生きた言葉が語りなおされ、畏怖と戦慄のなかで、「語られることば」を受け取りなおす。図1で言えば、言語aから言語bへの人間の言語レベルでの水平移動（の翻訳）ではなく、いったん言語aがそれを表現しているlogosの光（神の言葉）に遡り、その現前で語られることばを、屈折率の異なる言語bで表現しようとする試みである。とすれば、そういった翻訳とは、神（永遠の汝）が人間と交わす対話そのもの、そのつど新たに現成する・臨在する語られることばの現実化（現勢化）そのものである。[5]

5)　「語られることば」との対話

ここで「語られることば」の説明に用いた「現前」・「現成」・「臨在」は、小野氏がGegenwartを工夫して訳し出した語であり、「現勢化」も同様、論文の前半部分で氏が時間・言葉・力に関して考察した（まさに翻訳的に思考した）成果である。こうしてみると、小野氏がブーバーにおける「翻訳」の意義を強調したのが卓見だとわかると同時に、彼の論考が、時間・言語・力を三つ巴に絡めながら展開されていく、その論脈を読み取ることができる。

ところで、上にみた翻訳の垂直軸をめぐるエピソードは、オーソドックスなユダヤ信仰

NII-Electronic Library Service

History of Educational Thought Society

をもつ旧友との対話であるので、ストレートに神と聖書の関係が主題化されていた。しかし、ブーバーにあって対話・翻訳の垂直軸は、聖なる書を媒介したものに限らない。ここで、ブーバーの自伝をとりあげた以上、その「たたずまい」が非常に印象深い、彼の「祖母」についての記述にふれておきたい。「あることを、ほんとうに語るということは、どういうことか」を、ブーバーは、この「真実の言葉への愛」にみちた祖母の姿から学んだという（自伝：S.13）。家事を切り盛りする古きユダヤ女性であった祖母は他方で、古典読書の習慣（当時のユダヤ女性には不行儀ともされていた）を持ち合わせていて、たとえば、それを読んで大事だと思われたことを、小声でつぶやきながら家計簿を兼ねたノートに書き入れていた。その姿は、気高い精神をもつ人々と書物を通して交わり、応答している姿そのものだった。あるいは、彼女が折りふれて、しずかに窓から路地を眺めているようなとき、それはまるで何かに耳を傾けて聞き入っているかのように見え、「そのつど語りかけてくる誰かに語りかけているのだ」ということが少年ブーバーの眼にも明らかだった（自伝：S.14）。そのようにブーバーは祖母の、「語られることば」との対話について記している（――先述の「翻訳あそび」は、自伝のこの直後に記されている）。ブーバーの「対話としての翻訳」、「語られるものとしての、ことば」体験の、原点ないし原風景を、ここにうかがうことができる。

2．〈隔たり〉を維持した〈分有〉――Dia-logosの動態と本態へ

1）井筒俊彦『意識と本質』を補助線として

ところで、一なる〈ロゴス（ことば）〉と多なる〈ロゴイ（諸言語）〉の関係を図示しながら「翻訳」の意義を捉えようとした前掲の図１は、井筒俊彦が『意識と本質』[6]で「無分節態と分節態との二重写し」を示した図（井筒：175頁）をアレンジしたものである。小野論文の後半部の考察、すなわち次第に〈隔たりと分有〉の主題を前景に押し出しつつ、西洋思想史の系譜――『パルメニデス』以来の古代哲学、プラトンのイデア分有論、新プラトン主義の流出論からカバラーを含む中世の神秘主義、クザーヌス＝ベーメが更新する個体化問題など――を遡行し、そこにdia-logosの〈dia-〉、〈我―汝〉と〈我―それ〉の二重性、〈と〉（das Und）のダイナミックな動態を突き止めていく考察を理解するために、筆者にとって井筒の同書が随分と助けとなった。以下、小野氏の解き明かす、ロゴスを〈分有〉と〈隔たり〉において展開し現勢化するディアローグの本態を、井筒の仕事を援用して掴みとりたい。

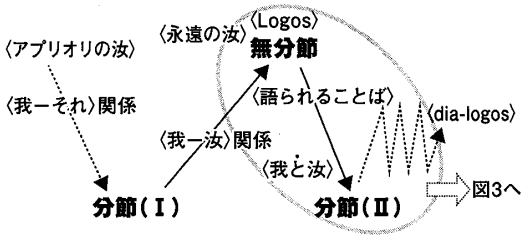

図２　ブーバーの基本概念と分節（Ⅰ）の前／後

前提として、図２を用意しておく。井筒の「分節（Ⅰ）→無分節→分節（Ⅱ）」の図式（井筒：147頁――これの詳細は西平直の研究[7]を参照）に、よく知られたブーバーの基本概念を付加したものである。ここは簡単に説明する。

母子一体感に包まれた未だ一般概念をもたない幼子の世界との関係、その主客未分化の関係性を、ブーバーは〈アプリオリの汝〉との関係と呼んだ。通常の言語を獲得した大人

NII-Electronic Library Service

の表層意識では、言語のもつ意味指示機能に基づいて、花を花として、樹を樹として、それをそれとして見立て、ブーバーの〈我－それ〉関係によって世界に区切りを入れて認識する――「分節（Ⅰ）」。他方、〈我－汝〉関係にあっては――たとえばブーバーの祖母が、まるで何かに聞き入っているように路地を眺めている姿を思い起こそう――、世界を分節する言語が脱落し、「現前する世界としての世界との関わり」に参入し、その出会いにおいて世界は、「一切が一切に透徹している全体にして一なるもの」である[8]――「無分節」。その世界は、長く持続しない。すぐにまた、言語的に分節化された世界に転化する。ただ、その関わりにおいて〈汝〉に向かって呼びかけ、「語られることば」を聴き、応答することができる（――〈我と汝〉）[9]。つまり「対話」することができるのであるが、さて、しかし、「分節（Ⅱ）」の事態は、ブーバーとともに、どのように説明することができるだろう。

2) 無分節と分節（Ⅱ）の二重写し

そのために、「無分節」と「分節（Ⅱ）」との「二重写し」の関係を示した井筒の図を再び呼び出して、それに助けられてブーバーの「対話〈dia-logos〉」を捉えてみよう。そう試みるとき、じつに小野氏が、ブーバーの対話

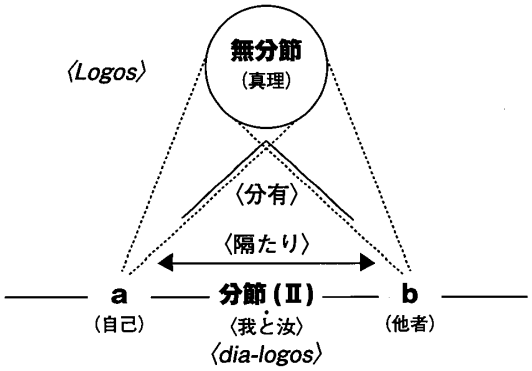

図3　隔たりと分有――〈dia-logos〉の動態と分節（Ⅱ）

の本態を〈分有〉と〈隔たり〉において把握した考察の意義が明らかになる。

まず、空円で示された「無分節」とは、禅者が「無」とか「空」とかいう名で意味するものであるが、より一般的な宗教的用語法では、しばしば「生命（宇宙的生命、神的生命）とか光（神的光）などと呼ばれる存在エネルギー」であり、「存在の限りない創造的エネルギーが瀰漫している」ところの「最高度の存在充実」である（井筒:175 頁）。――このエネルギーは、小野氏の翻訳語で言えば、「それ自体がおのれ自身を生み出し続ける力の根源」、「現成たる力の根源」（8 頁）、あるいは端的に「力」である。

そして、井筒がこの図に託して視覚化しようとしたポイントは、「分節（Ⅱ）」の平面において現成（現勢化）する「a（花）」や「b（鳥）」の一つひとつが、「それぞれ無分節者の全体を挙げての自己分節なのである」（井筒:175 頁――傍点は井筒）ということ。分節（Ⅰ）の場合のように「現実の小さく区切られた一部分が断片的に切りとられて、それが花であったり鳥であったりするのではない」（井筒:176 頁）。そのような分節的「多」が、分節（Ⅱ）の次元では、「多」でありながら「一」なる無分節と直結している。図を解説する次の井筒の記述が明快だろう。

> 無分節の直接無媒介的自己分節として成立した花と鳥とは、根源的無分節性の次元において一である。つまり、aとbとは、aとbとであるかぎりにおいては、明らかに区別されているが、空円においては一である。（井筒:176 頁――傍点は井筒）

3) 〈隔たり〉を維持した〈分有〉の動態

ここに、他でもない〈隔たりと分有〉、そ

NII-Electronic Library Service

History of Educational Thought Society

して〈と〉のトポロジーを見て取ることができる。「a（花）」と「b（鳥）」とは、それぞれが根源的無分節性の自己分節として、同じ一つの根源を「分有」している。と同時に、分節の水平面では、それぞれがaとbとであるかぎりにおいて明らかに区別され、「隔たり」を維持している。「分有のただなかでなお維持される隔たり」（11頁）、「分けると同時につなぐこと」（11頁）。小野氏が、これを説明（翻訳）するのに言葉を尽くすところだ。論の本旨であるので引用を重ねると、「両項いずれもが互いに絶対的に異なったはたらきを有しながら、しかも同時につながりへの志向性を有していること」（11頁）。あるいは、「対立しているように見えるものも、ある潜勢力のひとつの現勢態、ある相貌をもったあらわれとみなす立場へ、移動するべきかもしれない。一なるものが別のものへと開闢し、また別のものが一なるものへ畳み込まれていく」（12頁）。さらには、「〈隔たり〉を維持したままで、隔たったもの同士がそれにもかかわらず邂逅する事態としての、両者の隔たりの〈横断〉として理解すべき「dia-」である。それは必ずしも、何らかの共通項によって通分可能な共同性から出発するタイプの出会いではない」（13頁）。このように説明する「と」や「dia-」の矛盾を孕んだ二重の運動。この肯定と破棄が相即する二元構造は、「かなり入り組んだ複雑なもの」だと氏も述べる性格をもつだけに、図3のごときも（図解にいつも付きまとう短絡化の弊は否めないが）それを理解する一助となるだろう。

こうして、井筒の解明する「精神的東洋」（彼のそれにはユダヤ神秘主義カバラーも含まれる）の全般に特徴的な「神秘（深秘）」の理解枠組みのなかに、小野氏が読み解くブーバーの〈隔たりと分有〉の哲学を、まずはその入り口にまで招き入れてみた。それが可能だったのも、小野氏がブーバーの思想を、「神秘主義から対話へ」の一方通行ではなく、神秘主義的言語を対話へと折り返す視点をもって、そこに分有の哲学を見出したからである[10]。——だがむろん、この井筒・東洋思想のバリエーションは多彩、かつ奥行きは深い。そこにブーバーが分け入っていくと次々と問いが生じる[11]。ここでは深入りできないが、もう一歩だけ歩をすすめて、そのバラエティのなかで他と比してすぐれてブーバー哲学ならではの特質は何か、それを確かめておこう。小野論文とともに、2点を指摘しておく。

4）特殊にブーバー的なるもの——「他者への関与」と「ロゴスへの信頼」

ひとつは、「（他者への）関与」の強調である。小野氏は、「隔たりを媒介する分有（methexis／participatio）への問い」を、『パルメニデス』以来の哲学史の伝統のなかに探求しつつ、それを継承しつつも超脱するブーバーの企ての特質を、レヴィナスとともに「他者への関与」に真理をとらえる点に見出した（11頁）。これはすなわち、図3で言えば、aとbとが、ブーバーにあっては、花や鳥ではなく、すぐれて、人と人のあいだ、自己と他者とであるということだ。個体化の厳格さと深さに応じて絶対的に異なる他者とのあいだで、その隔たりを維持したまま、自己においてその光彩を放つ真理の光が、異なった彩色で他者の許でも輝くのを見ること、そのことによって、同じ一なる真理（ロゴス・無分節者）の分有を確証すること。この、関与における隔たりと分有について述べるブーバーの一節を引いておく。

NII-Electronic Library Service

真理に対する自己の関係は、その同じ真理に対する他者の関係によって高められる。その真理に対する他者の関係は、その人の個性に応じて異なっており、各々に異なった仕方で芽を出し、育っていく。人間にとってなくてはならず、また許されていることは、真の出会いの中で一人ひとりの個性的な存在を確証し合うことである。そして更には、自らの魂が得た真理が、関わりをもった他者の許で異なった仕方で光り輝き、まさにそのことによって、その真理が確証されるのを見ることなのである。[12]

もう一つ、ここに際立てられるべきブーバー思想の特質は、やはり「ロゴス（言葉）」への信頼（祖母の後姿に学んだ「真実の言葉への愛」）と、それゆえの「ディアローグ（対話）」の実践である。それは、井筒の探究した「精神的東洋」、わけても禅における言語への不信感とそれゆえの「坐禅（黙想）」や「問答」（――それは「対話」というよりも、言語の有意味性を解体して無意味と化す「超・対話Beyond-dialogue」[13]）といった実践との対比において、顕著にブーバー的な特徴だといえる。ブーバー自身、その著『対話』において「言葉なき深みDie wortlose Tiefe」と題した節を設けて、「言葉Wort」が無く、したがって「応答Antwort」も無い「沈黙の一如」を根源存在とみる立場に対し、「責任のあるverantwortlich認識」から異論を唱えている[14]。ブーバーにあって「無分節」（真理・真如）は、「言葉なき深み」や「沈黙の一如」に収まらず、どこまでも応答すべく語られる「ことばWort」が、自らを分節しながら展開し、現勢化してくる創造の根源的な力としての〈ロゴスLogos〉であった。そして、それへの接頭辞「dia-」を小野氏が4点の特質において分析して明らかにしたように（13頁）、〈隔たりと分有〉という両極が展開する力動的な場所において、その力を不断に現勢化し続ける実践こそが「dia-logos（対話）」に他ならない。

おわりに――折り返し続ける神秘と対話

いま最後に、井筒の探索した精神的東洋の大海に埋没してしまわない（共通性にもとづいて一般化しすぎない）特殊にブーバー的なるもの、それをあらためて問い質しておいた。もちろん、禅が否定する「言語」は分節（Ｉ）の位相におけるそれであり、ブーバーの「ロゴス（ことば）」とは位相が異なる。井筒も繰り返し強調したように「無分節」は、そこで終局する無ではなく（あるいはサルトルが嘔吐するような不気味な黒々とした塊でもなく）、「無極にして太極」または「理（ことわり）」としても把握される両価性をもつ。翻って、小野氏が論の最終節で、ブーバーの「理性」への、一義的に短絡できないアンビバレントなスタンスを的確に確認してフォローした（16頁）ように、ブーバーのロゴス（理性）へのスタンスもまた、同様に両義性を含んでいることに留意しておく。おそらく、ここから更にブーバーの対話（dia-logos）と神秘主義（言葉なき深み）との二者択一ではない二重性の襞に分け入るとすれば、この「ロゴスと無分節」の吟味から入る道筋が一つありえるだろう。[15]

以上の小野氏の論考は総じて、ブーバーの「対話哲学」を、「〈隔たりと分有〉の哲学」へと翻訳する試みである、とされる。それが妥当な読み替えであるかどうか、この翻訳によって零れ落ちるものがあるとすれば何か、ここでそれを問うことには、ほとんど意味が

NII-Electronic Library Service

History of Educational Thought Society

ない。大切なのは、小野氏が、上に言及したインパクトある氏の既稿「分有の思考へ」以来、この思考でもって、神秘主義と対話のあいだで九折坂を折り返しながら登攀を試み、いまや豊穣な思想史を見渡す彼自身の視界の開けを獲得しつつあること、しかも、そうして辿りつく「〈隔たりと分有〉の哲学」が、俯瞰的に高みから見下ろす高原ではなく、まさにブーバーとともに緊迫感のある「狭き尾根道」を歩むものであること——すなわち、小野論文結びの一節を引けば、「生の抱え込むアポリアの汲み尽くしえなさに寄り添いながら、〈一〉なる普遍にゆきつく真理概念には還元不能な「別様の真理」に触れるべく、世界をつくりかえてゆく思考の無窮の動性」(16頁)でもって、どこまでも駆け抜けていく思考であること。それをこの論考は、何より説得的にもの語っている。

註

(1) 小野氏が作成した翻訳者ブーバーの作品一覧(註4、17頁——以下、本誌所収の小野フォーラム報告論文からの引用は、引用箇所の末尾に頁数のみを括弧書きで記す)を通覧してあらためて気づかされるのは、その数多の量とともに、ブーバーが翻訳したテキストが、ハスィディズムの伝承説話やヘブル聖書をはじめ、ほぼ全てと言ってよいほど口承や対話形式の物語であるということ。ブーバーにとって翻訳が、「語られた言葉の語りなおし」であったことを確認できる。

(2)「語りなおし」という主題について更には、拙論(2003)「沈黙が語る言葉/出会いと対話と物語」(矢野智司・鳶野克己編『物語の臨界/物語ることの教育学』世織書房、所収)をも参照されたい。

(3) Buber, M. 1986 [1960]. *Begegnung: Autobiographische Fragmente*. Verlag Lambert Schneider. 以下、この自伝からの引用については、本文中の引用箇所の末尾に「(自伝:頁数)」と略記する。

(4) この点について小野氏は明快に、「いわば、〈聖典解釈的モノローグ精神〉を媒介にしていかにして〈直接啓示的ダイアローグ精神〉が可能かを彼は問い続けた」と述べている。(18頁の註8)

(5) この連関における「Logos(ことば)」を鈴木は「こだま」という和語で掴んで、「訳語のなかに原語のこだまを呼び覚ますことが翻訳者の使命」と述べる(鈴木晶子2009「思想史研究の位相/思想史を読むことと書くこととのあわい」『近代教育フォーラム』第18号、27頁)。

(6) 井筒俊彦(1983)『意識と本質/精神的東洋を索めて』岩波書店。以下、本書からの引用については、本文中の引用箇所の末尾に「(井筒:頁数)」と略記する。

(7) 西平直(2001)「東洋思想と人間形成——井筒俊彦の理論地平から」『教育哲学研究』第84号、ほか。とくに「図3チャート」(23頁)を参照したものである。このチャートと本稿図2とを重ね合わせ、「東洋思想と人間形成(発達)」の研究にブーバー哲学を接続してみる課題は興味深いが、機会をあらためる。

(8) Buber, M. 1962 *Werke Erster Band: Schriften zur Philosophie*. Kösel Verlag and Verlag Lambert Schneider, S.100, 414. このような「出会いに開示される世界」の無分節の特質を、「秩序づけられた世界」(分節態)との対比において、拙著(2007)『ブーバー対話論とホリスティック教育』勁草書房(とくに第2,3章)において考察した。

(9) そのような呼びかける主体性、あるいは応答する主体性を持った〈我〉と〈汝〉の関係を、言葉を失って関わりのなかに溶け込んだ〈我-汝〉関係から区別して、筆者は〈我と汝〉と概念化した。前掲拙著(2007)第4章を参照。分節(Ⅱ)の事態の説明を、この地点から論を起こして開始することもできるが、ここでは先を急ぐ。

(10) 小野文生(2007)「分有の思考へ——ブーバー

NII-Electronic Library Service

History of Educational Thought Society

の神秘主義的言語を対話哲学へ折り返す試み」『教育哲学研究』第96号。

(11) この井筒の仕事は、周知のごとく東洋（極東、中東、近東と呼び慣わされている広大なアジア文化圏）の哲学思想全体のなかに、人間意識の様々に異なるあり方が「本質」なるものをどのようなものとして捉えるかを探索し、（歴史的ではなく）共時的思考の次元でそのバリエーションをマッピングしたものである。この布置におけるブーバー哲学の位置を――超越的に実在する「有」的人格神をもつ正統ユダヤ教や新プラトン主義の流出論との差異、密教のマンダラ、イブン・アラビーの「有無中道の実在」、大乗仏教の「真空妙有」、とくに空海の「阿字真言」との類縁性において、カバラーのセフィーロートの特質（存在エネルギーとしての神的コトバの自己分節的展開）を捉える記述などから――探りあてる研究は別稿を俟つことになる。

(12) Buber, M. 1962, ibid., S.421. 1950年の論文'Urdistanz und Beziehung'のこの一節については、拙著（2007）第6，7章でも詳しく考察した。

(13)「超・対話（対話を超えて：Beyond Dialogue）」は井筒『意識と本質』（前掲）の巻末に収められた論文「対話と非対話」の原タイトルであり、翻訳もふくめた異文化間での言語的コミュニケーションの可能性と不可能性を禅の立場から主題的に論じていて示唆に富む。なお、禅の問答とブーバー的対話の異同について、上田閑照（1973）『禅仏教―根源的人間』筑摩書房（とくに第3章「対話と禅問答」）の考察を参照。

(14) Buber, M. 1962, ibid., S.197. このブーバーの異論については、拙著（2007）第5章を参照。

(15)「分有」概念に関しても、プラトン的分有論が実在的（有的）イデアを前提しているのに対して、ブーバー＝小野の分有は（井筒の「無分節」に近しく）同様の両義的なダイナミズムにおいて理解されている点、重要であるがここでこれ以上は立ち入れない。

執筆者

吉田敦彦（よしだ　あつひこ）
大阪府立大学（Osaka Prefecture University）
教育人間学・人間形成論
『ホリスティック教育論』（日本評論社 1999）、『ブーバー対話論とホリスティック教育』（勁草書房 2007）、『世界のホリスティック教育』（日本評論社 2009）
E-mail: atsu@hs.osakafu-u.ac.jp

NII-Electronic Library Service